

## 第6章 中高生の社会的アイデンティティに関わる認識が 共生志向に及ぼす影響

新井 雅

### 1. 本章の目的

現代では、性別、年齢、障害、国籍、人種等に起因する差別や偏見等により、日常の人間関係から国家間関係に至るまで様々な葛藤・対立・紛争の問題が生じており、人間社会における「共生」に向けた取り組み（内閣府における共生社会形成促進のための政策研究会，2005）は重要な課題となっている。

岡本（2011，2016）は「共生」について、〈社会の中の多様性の尊重〉の上に〈社会の凝集性〉を実現しようとする（社会のなかにさまざまな違いがあることを認め、かつそれを前提としたうえでまとまりを志向する）概念であること、「あるもの」と「異なるもの」の関係性を対象化し両者を隔てる社会的カテゴリ（社会現象を整序する枠組み）を更新する営みであること、さらに完成状態としての概念ではなく社会的カテゴリの更新自体が生み出す新たな隔たりや葛藤の可能性をも視野に入れた継続的な営み（プロセス）となり得るものであると指摘している。

上に示されるように、本研究（「共生」を実現する教育の実証的検討）では「共生」について、次の2点を重視している（「まえがき」参照）。第一に、プロセスとしての共生（共生とは達成すべき目的や完成状態ではなく、継続的に取り組むべき作業であるとの見方）である。第二に、「男性／女性」、「障害者／健常者」「日本人／外国人」「若者／高齢者」など、社会や個人を規定・構築する社会的カテゴリが排除や分断・差別を生み出す機能を有するものであることから、これらの社会的カテゴリを固定的に捉えず、相対化することが必要であるとの考えである。このように社会的カテゴリに着目しつつプロセスとしての共生を想定すると、「社会的カテゴリの絶えざる問い直し」（現下の社会的カテゴリに縛られることなく、それを絶えず問い直すこと）を通して、人はしなやかに物事を考え行動することが可能となり、それが共生ならざる事情の解決につながると考えられる。このような視点に立ちながら本研究では、特に「共生」実現のための学校教育における教育実践（共生教育）の可能性について探ることを目指している。

以上の前提を踏まえ本章では、中学生・高校生の社会的アイデンティティに関わる認識に焦点を当てる。自らが属する社会的カテゴリに属し、そこに個人の感情・価値的な意味づけが伴うものは社会的アイデンティティ（Social Identity）（Tajfel & Turner, 1986）と呼ばれる。筆者は共生社会や共生教育の展開に貢献し得る各種の心理学研究を概観する中で、この社会的アイデンティティの概念・理論がステレオタイプ、差別、偏見等の理解・

改善，さらには人間社会における共生の在り方を検討する際に有用であることを指摘した（新井・庄司，2016）。すなわち，個人・集団間の社会的アイデンティティが否定的な形で固定化されると，相互の関係を分断させ，偏見・差別や社会的紛争を助長してしまう可能性があること（Bal-Tal，2011），カテゴリ間の分断を除去・変容する取組がその改善に重要であることから（e. g.，Brewer，2011），社会的アイデンティティに関わる個々人の認識は，共生教育を効果的に展開する上で考慮すべき一つの重要な要因と考えられる。

そこで本章では，中高生の社会的アイデンティティに関わる認識として Q22「自己の社会的帰属意識」の項目を中心的に取り上げ，これらの認識が人々との関係や社会生活における「共生」を肯定的に志向する態度（ここでは「共生志向」と呼ぶ）に及ぼす影響を検討する。具体的には，中高生の社会的アイデンティティに関わる個々人の認識の多様性に焦点を当て，それらが共生に関わる経験や認知とどのように関連し，どのように共生志向に影響を及ぼしているのかを多角的に検討することとした。これらの検討を行うことにより，社会的カテゴリの絶えざる問い直しを踏まえたプロセスとしての共生を進めるための教育実践に向けて，有益な知見が得られる可能性があると考えられる。

## 2. 共生志向の関連要因－社会的アイデンティティに関わる認識に焦点を当てて－

まず，中高生の社会的アイデンティティに関わる認識を含め，共生志向と関連する要因について包括的に検討した。具体的に対象とした変数と，その算出方法を表 1 に示した。

表 1 の①～⑤は家庭や学校，地域における様々な他者への世話や他者との交流経験（Q6，Q8，Q12，Q9，Q10），⑥～⑨は共生社会に関わる様々な認識（Q19，Q13，Q15），⑩は社会的アイデンティティに関わる自己の認識の多様性（Q22），⑪～⑭は共生志向に関わる変数として障害者や外国人などへの配慮や様々な他者との交流，共生のための社会づくりを肯定的に志向する意識（Q11，Q16，Q17）を取り上げた。

表 1 分析対象とした変数の一覧

①家族内の話題：Q6 の項目 1～5 の合計（「よくある」を 4，「わりとある」を 3，「あまりない」を 2，「ほとんどない」を 1 として算出）
②家族における配慮を必要とする人の世話：Q8 の項目 1～3 の合計（「いつもする」を 4，「ときどきする」を 3，「あまりしない」を 2，「ほとんどしない」を 1 として算出。「そうした人はいない」へ回答した対象者を除外）
③家の外での配慮を必要とする人の世話：Q12 の項目 1～4 の合計（「とてもよくしてきた」を 4，「よくしてきた」を 3，「あまりしてこなかった」を 2，「してこなかった」を 1 として算出した）
④学校内における配慮を必要とする人との関わり：Q9 各項目の「ある」の回答数
⑤学校外における配慮を必要とする人との関わり：Q10 各項目の「ある」の回答数

- ・「共生社会」という言葉の認知：Q19 から 2 つのダミー変数を作成
  - ⑥ 「「共生社会」という言葉の意味も知っている」を 1, それ以外を 0
  - ⑦ 「「共生社会」という言葉を聞いたことがない」を 1, それ以外を 0
- ⑧ 社会問題となりうる「違い」の認識：Q13 の回答数
- ⑨ 日本社会における共生の現状認識：Q15（日本社会の現状認識）を用いた主成分分析により算出された第一主成分の主成分得点<sup>1)</sup>
- ⑩ 社会的アイデンティティの多様性：Q22（自己の社会的帰属意識）を用いた主成分分析により算出された第一主成分の主成分得点<sup>2)</sup>
- ⑪ 他者のための積極的ケア：Q11（困っている他者への手助け志向）における「積極的に手助けしたい」の回答数
- ⑫ 他者のための援助要請：Q11（困っている他者への手助け志向）における「対応できる人に助けを求めたい」の回答数
- ⑬ 障害者や外国人のための社会づくり：Q16（外国人・障害者のための社会づくりへの賛否）を用いた主成分分析により算出された第一主成分の主成分得点<sup>3)</sup>
- ⑭ 外国及び外国人との積極的交流：Q17（国際志向）を用いた主成分分析により算出された第一主成分の主成分得点<sup>4)</sup>

続いて、成人を対象とした社会調査において共生志向に影響を及ぼす要因を検討した新井・桜井（2014）を参考に、仮説的なモデルを設定した。すなわち、中学校及び高校の生徒たちがこれまでの家庭生活や学校生活において人々との関係や社会的な事柄として「共生」に関連した経験をどのように積んでいるか、また、共生社会についてどのように認知しイメージしているかという点が、障害者・外国人・高齢者への関わり方、日本と外国との関係などにおける共生志向的な態度に影響を及ぼしている可能性を想定した。そこで、家庭や学校、地域における他者の世話や他者との交流経験（Q6, Q8, Q12, Q9, Q10）が、共生社会に関わる様々な認識（Q19, Q13, Q15）や本章で特に焦点を当てている社会的アイデンティティに関わる認識の多様性（Q22）を媒介として、中高生の共生志向的な意識や態度（Q11, Q16, Q17）に影響を及ぼすというモデルを設定し、分析を行った。

さらにここでは、男女別の性差、及び中学生・高校生といった発達段階別にも分析を行い、各変数が共生志向に及ぼす影響の程度の違いについて、詳細に分析することとした。

#### （1）中学生・高校生全体のデータに基づくパス解析

効果量の観点から、標準偏回帰係数が.10 以上のものをパス図に示した。全体データに基づく分析結果から（図 1）、家庭や学校、地域における他者の世話や他者との交流経験が、共生社会に関わる様々な認識や社会的アイデンティティに関わる認識の多様性、さらには共生志向的な意識や態度に直接的に影響を及ぼしていることが示された。成人を対象とし

た調査結果（新井・桜井，2014）との単純な比較はできないが，中高生のデータにおいては共生社会に関わる様々な認識から共生志向へ及ぼす影響は確認されず，社会的アイデンティティの多様性のみ外国及び外国人との積極的交流に正の影響（ $\beta = .10$ ）を示していた。

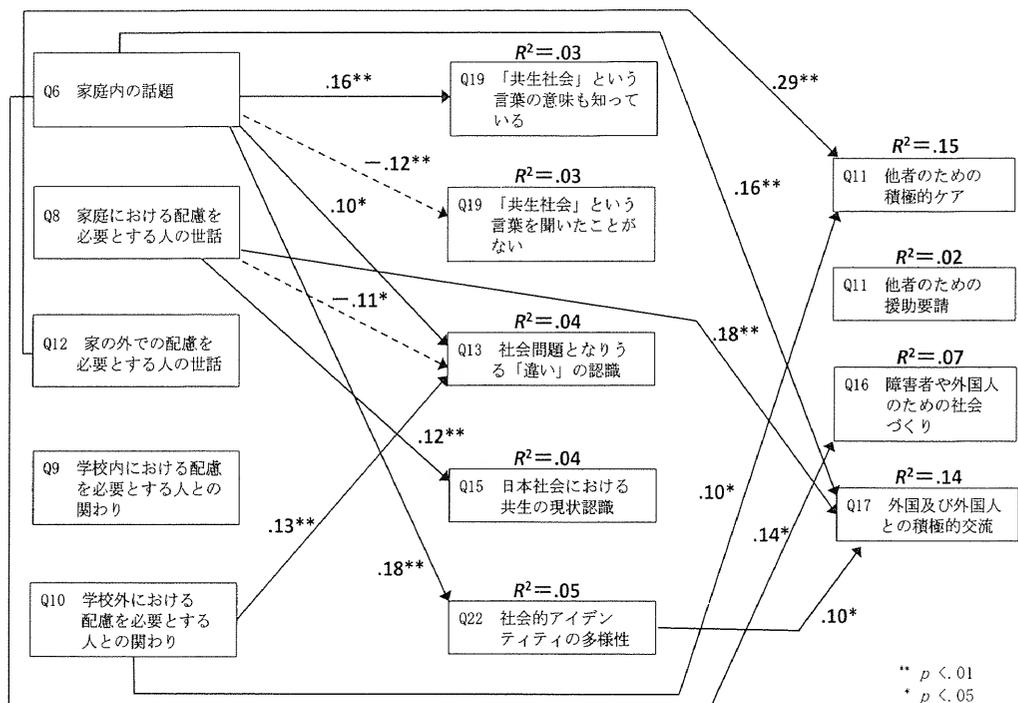


図 1 中高生の共生志向に影響を及ぼす要因に関するパス解析（全体）

## （2）中学生・高校生の男女別のデータに基づくパス解析

次に，中学生・高校生の男女別のデータでパス解析を行った結果（図 2～4），中学生においては，家族内の話題（Q6）や家の外での配慮を必要とする人の世話（Q12），学校外における配慮を必要とする人との関わり（Q10）などが，直接的に共生志向に正の影響を及ぼしていた。また，中学生・高校生の男子においては，家の外での配慮を必要とする人の世話（Q12）が他者のための積極的ケア（Q11）や外国及び外国人との積極的交流（Q17）に他の変数に比べてやや強い正の影響を及ぼしていた。中学生・高校生の女子においても，家の外での配慮を必要とする人の世話（Q12）が他者のための積極的ケア（Q11）に正の影響を及ぼしていた一方で，家族内の話題（Q6）や家族における配慮を必要とする人の世話（Q8）が各種の共生志向に関わる変数に正の影響を及ぼしていた。男子においては特に地域での経験，女子では家庭での経験が共生志向的な態度に肯定的な影響を及ぼす重要な要因となっているのかもしれない。

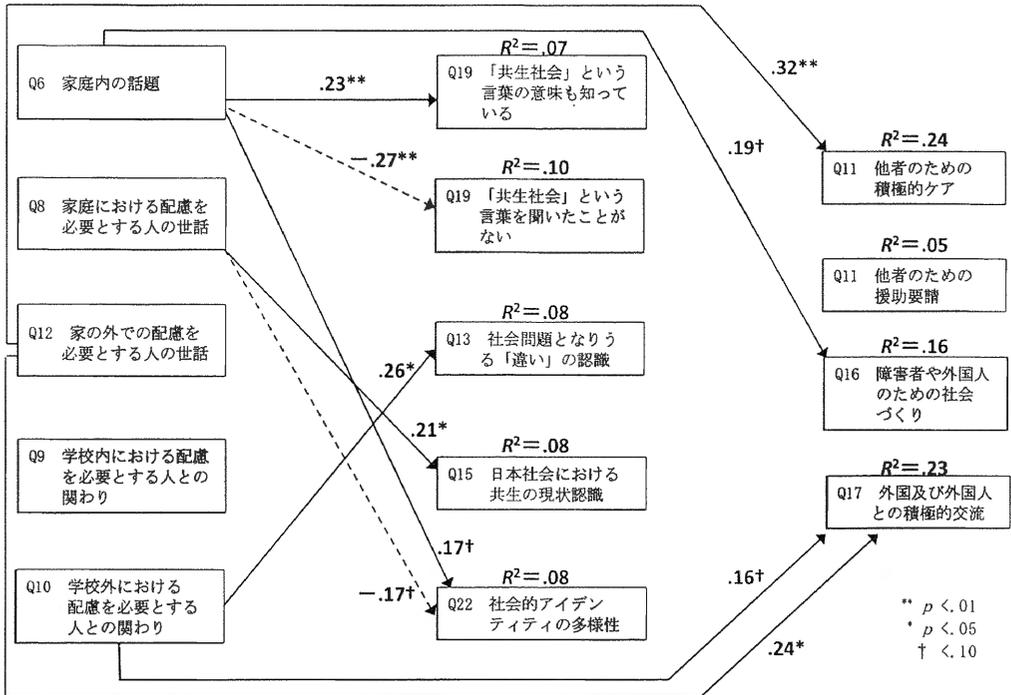


図2 中高生の共生志向に影響を及ぼす要因に関するパス解析 (中学生男子)

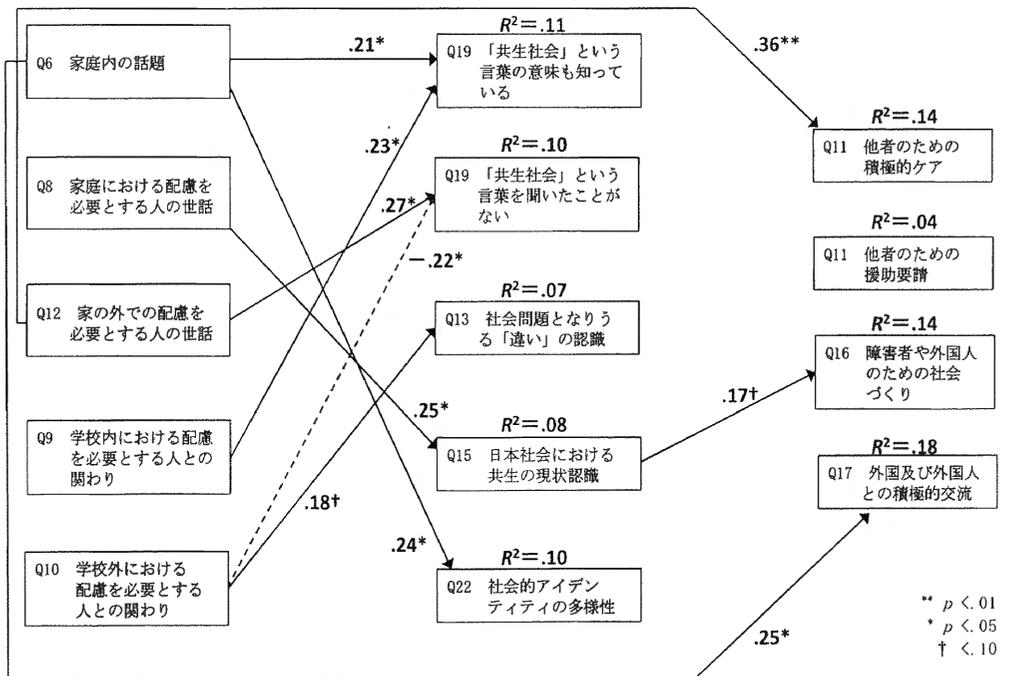


図3 中高生の共生志向に影響を及ぼす要因に関するパス解析 (中学生女子)

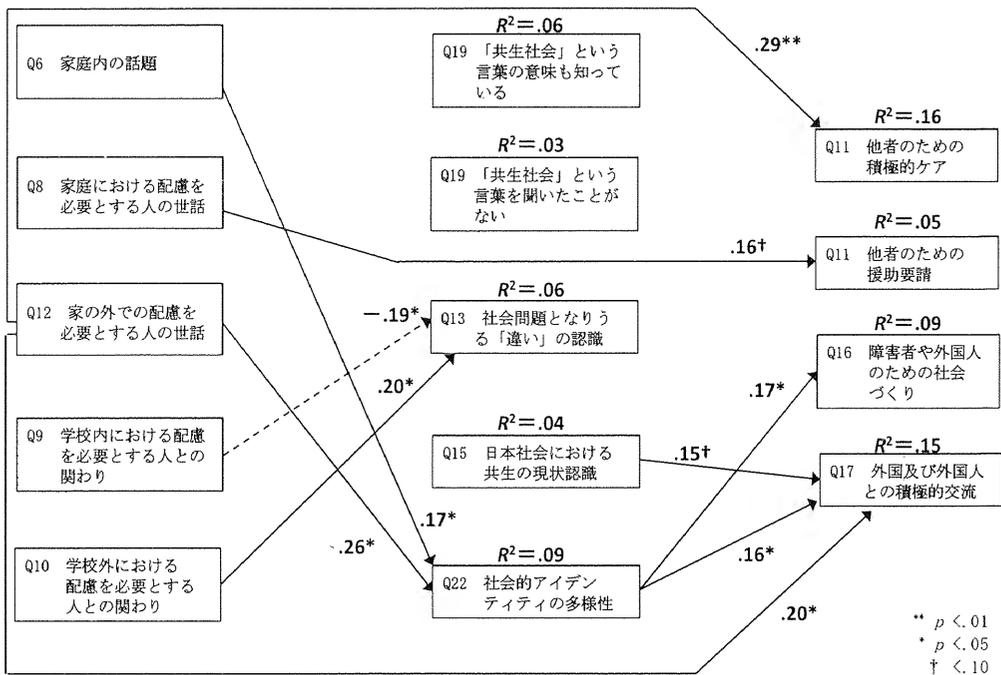


図4 中高生の共生志向に影響を及ぼす要因に関するパス解析 (高校生男子)

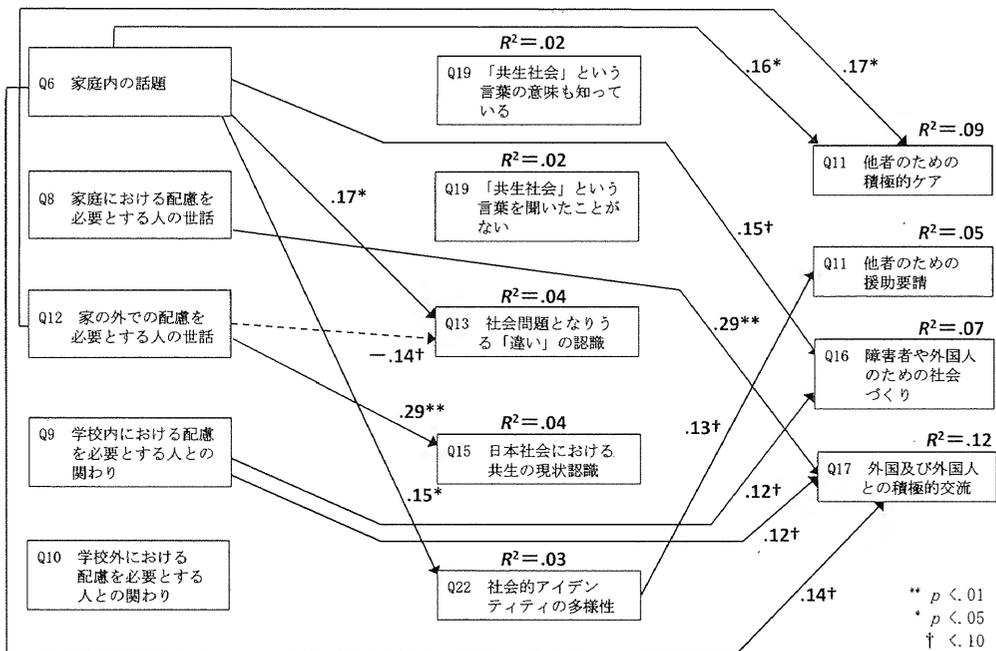


図5 中高生の共生志向に影響を及ぼす要因に関するパス解析 (高校生女子)

着目すべき点は、社会的アイデンティティの多様性が共生志向に及ぼす影響に関して中学生・高校生別に違いが見られた点である。中学生のデータでは男女共に、社会的アイデンティティの多様性から共生志向への影響は示されなかったものの、高校生のデータでは正の影響が確認された（男子：障害者や外国人のための社会づくり（Q16）と外国及び外国人との積極的交流（Q17）、女子：他者のための援助要請（Q11）に正の影響）。社会的アイデンティティが共生志向に及ぼす影響の程度は、発達段階別に異なっている可能性がある。

加えて、社会的アイデンティティの多様性に影響を及ぼす変数は、中学生・高校生及び男女共に家族内の話題（Q6）が一貫して正の影響を及ぼしていた。発達段階や性差に関係なく、家庭内において社会や人々の生活について会話する経験は、様々な視点から自らの社会的アイデンティティに関わる認識を意識化することに寄与している可能性がある。

なお、全体でのデータ分析と同様、「共生社会」という言葉の認知（Q19）や社会問題となりうる「違い」の認識（Q13）などから各種の共生志向への影響は示されなかった。中高生においては、共生に関わる認知やイメージよりも、共生と関連する家庭や地域での直接的経験の方が、共生志向的な態度に肯定的な影響を及ぼしているのかもしれない。

### 3. 中高生の社会的アイデンティティに関わる認識のパターンと諸変数との関連

前節では中高生の共生志向に影響を及ぼす要因を包括的に検討する中で、社会的アイデンティティの影響について確認した。本節では、中高生の社会的アイデンティティに関わる認識を中心に据えて、共生に関わる諸変数とどのような関連があるのかを詳細に検討する。特に、自らの社会的アイデンティティについては、個々の生徒ごとに様々な認識のパターンを有している可能性が想定できる（例：ある生徒は自らの性別や所属学校に関わる側面を日頃から認識し、また別の生徒については日本あるいは日本人であるとの認識が日頃から強く意識している…など）。したがって、中高生一人ひとりの社会的アイデンティティに関わる認識についてどのようなパターンがみられるのか、様々な認識のパターンを有する中高生にはどのような特徴差がみられるのか詳細に検討する必要がある。

#### （1）中高生の社会的アイデンティティに関わる認識パターンの特徴

表1の社会的アイデンティティに関わる認識の変数を用いて、k-means法によるクラスタ分析を行った。3～5のクラスタ解を算出し、各クラスタに含まれる生徒の人数とクラスタの解釈可能性に基づいて検討した結果、4クラスタ解に基づく分類が妥当であると判断した。この4つクラスタにおける各変数の平均標準得点を表2に示した。

表2より、第一クラスタは全ての項目において正の値を示していたことから「社会的アイデンティティ多様群」（CL1；425名）、第二クラスタは「男（女）である」「〇〇歳（自分の年齢）である」「中学生（高校生）である」などの項目において正の値を示したことから「ミクロ・社会的アイデンティティ群」（CL2；272名）、第三クラスタは「〇〇という国

(日本、中国、アメリカなど)の国民である」「〇〇人(日本人、中国人、アメリカ人など)である」の項目のみ正の値を示していたことから「マクロ・社会的アイデンティティ群」(CL3; 237名)、第四クラスは全ての項目において負の値を示していたことから「社会的アイデンティティ低群」(CL4; 126名)と解釈された。各クラスターの学年・性別ごとの生徒の人数・割合を表3に示した。

表2 クラスター群別の社会的アイデンティティに関わる認識の平均標準得点

	CL1 社会的アイデンティティ多様群 (N=425)	CL2 ミクロ・社会的アイデンティティ群 (N=272)	CL3 マクロ・社会的アイデンティティ群 (N=237)	CL4 社会的アイデンティティ低群 (N=126)
1. 男である, 女である, ということ	<u>.48</u>	<u>.24</u>	-.55	-1.17
2. 〇〇歳(自分の年齢)である, ということ	<u>.60</u>	<u>.26</u>	-.76	-1.18
3. 中学生である, 高校生である, ということ	<u>.51</u>	<u>.37</u>	-.60	-1.40
4. 〇〇中学校・〇〇高等学校(通っている学校)の生徒である, ということ	<u>.54</u>	<u>.19</u>	-.52	-1.30
5. 若者である, ということ	<u>.56</u>	<u>.21</u>	-.52	-1.36
6. 〇〇家(生まれ育った家族)の一員である, ということ	<u>.73</u>	-.14	-.51	-1.18
7. 〇〇市(町・村)の市民(町民・村民)である, ということ	<u>.75</u>	-.51	-.22	-1.08
8. 〇〇県(都道府)の県民(都民・道民・府民)である, ということ	<u>.77</u>	-.61	-.04	-1.20
9. 〇〇という国(日本, 中国, アメリカ, ...)の国民である, ということ	<u>.74</u>	-.72	<u>.23</u>	-1.39
10. 〇〇人(日本人, 中国人, アメリカ人, ...)である, ということ	<u>.74</u>	-.63	<u>.16</u>	-1.46

注) 正の値についてゴシック体で強調表示した。

表3 クラスター群別の学年・性別の人数・割合

		中学生		高校生		全体
		男子	女子	男子	女子	
CL1 社会的アイデンティティ多様群	人数	99	84	112	125	420
	%	23.57	20.00	26.67	29.76	100.00
CL2 ミクロ・社会的アイデンティティ群	人数	40	38	73	119	270
	%	14.81	14.07	27.04	44.07	100.00
CL3 マクロ・社会的アイデンティティ群	人数	47	35	75	74	231
	%	20.35	15.15	32.47	32.03	100.00
CL4 社会的アイデンティティ低群	人数	35	21	40	30	126
	%	27.78	16.67	31.75	23.81	100.00

## (2) クラスター群別の特徴および諸属性との関連

次に, これらの4タイプの生徒が具体的にどのような特徴を有しているのか, そして共

生志向に関わる変数にどのような違いがみられるのか詳細に検討することとした。具体的には、表1で対象とした変数を中心に、①家庭での経験(Q6, Q8)、②学校での経験(Q9)、③地域での経験(Q10, Q12)、④共生社会に関わる認識(Q13, Q15)、⑤共生志向の特徴(Q11, Q16, Q17)、⑥生き方の願望の特徴(Q18)について検討を行うこととした。

各クラスタの生徒が家庭、学校、地域でどのような経験をし、共生社会についてどのように認識し、さらに共生志向においてはどのような特徴を有しているのかをより具体的に検討するため、CL1~4を独立変数、表1に示した変数のうちQ6, Q8, Q9, Q10, Q12, Q13, Q15, Q11, Q16, Q17を従属変数として1要因分散分析を行った(表4)。

表4 社会的アイデンティティに関わる認識のクラスタ群別の分散分析結果

		CL1	CL2	CL3	CL4	F値	$\eta^2$	多重比較
Q6 家庭内の話題	M	11.51	10.73	10.36	9.44	14.23 **	.04	CL1 > CL2・CL3 > CL4
	SD	3.62	3.19	3.19	3.42			
Q8 家族における配慮を必要とする人の世話	M	3.85	3.66	3.14	3.97	3.99 **	.02	CL1・CL4 > CL3
	SD	2.17	2.02	1.91	1.97			
Q9 学校内における配慮を必要とする人との関わり	M	.78	.49	.83	.53	2.65 *	.01	CL1・CL3 > CL2・CL4
	SD	1.82	1.40	1.82	1.27			
Q10 学校外における配慮を必要とする人との関わり	M	2.90	2.70	2.62	2.54	2.39 <i>n.s.</i>	.01	
	SD	1.71	1.55	1.68	1.73			
Q12 家の外での配慮を必要とする人の世話	M	7.83	7.54	6.97	6.89	7.93 **	.02	CL1・CL2 > CL3
	SD	2.75	2.50	2.25	2.77			CL1 > CL4
Q13 社会問題となりうる「違い」の認識	M	4.24	4.14	4.10	3.80	1.07 <i>n.s.</i>	.00	
	SD	2.42	2.40	2.57	2.41			
Q15 日本社会における共生の現状認識	M	.17	-.08	-.04	-.32	9.26 **	.03	CL1 > CL3 > CL4
	SD	.96	1.04	.92	1.10			CL1 > CL2
Q11 他者のための積極的ケア	M	2.21	2.06	1.87	1.84	2.14 <i>n.s.</i>	.01	
	SD	1.94	1.92	1.97	1.97			
Q11 他者のための援助要請	M	1.04	.89	.91	.75	1.62 <i>n.s.</i>	.01	
	SD	1.46	1.33	1.39	1.26			
Q16 障害者や外国人のための社会づくり	M	.10	-.01	.00	-.21	3.15 *	.01	CL1 > CL4
	SD	.95	.89	.97	1.29			
Q17 外国及び外国人との積極的交流	M	.11	.01	-.02	-.36	7.28 **	.02	CL1・CL2・CL3 > CL4
	SD	.98	.92	.94	1.23			

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

その結果、半数以上の変数において5%水準または1%水準で有意差がみられ、多重比較の結果、家族内の話題(Q6)ではCL1 > CL2・CL3 > CL4、家族における配慮を必要とする人の世話(Q8)では、CL1・CL4 > CL3であった。全体としてCL1の生徒が他の群の生徒よりも、自らの住んでいる町、政治や社会の問題、障害者・外国人・高齢者の生活などにつ

いて家族と話す経験が多く、家庭内にて小さい子やお年寄り、障害のある家族の世話などをする経験が多いことが示された。CL4 の生徒については家庭内での他者の世話経験は多い一方で、社会や人々の生活に関して家族で話をする経験は少ないという特徴があることが示された。学校内における配慮を必要とする人との関わり (Q9) では多重比較の結果、CL1・CL3>CL2・CL4 であり、CL1 や CL3 の生徒が学校内での障害児や外国の子と勉強をしたり話をしたり手助けをするなどの経験数が多いことが示された。また、家の外での配慮を必要とする人の世話 (Q12) においては、多重比較の結果、CL1・CL2 > CL3, CL1 > CL4 であった。CL1 や CL2 の生徒が他の群の生徒よりも、家の外の地域において小さい子、高齢者、障害者、外国人の世話を多く経験している可能性が示された。日本社会における共生の現状認識 (Q15) では CL1 > CL3 > CL4, CL1 > CL2 であり、CL1 の生徒が他群の生徒よりも共生に関わる現在の日本社会の現状について肯定的に認識している可能性が示された。さらに、共生志向に関わる変数として障害者や外国人のための社会づくり (Q16)、外国及び外国人との積極的交流 (Q17) において、それぞれ CL1 > CL4, CL1・CL2・CL3 > CL4 であった。CL1 の生徒が他の群の生徒に比べて、障害者や外国人のための社会づくりや、外国・外国人との積極的交流に対して肯定的な意識を有している可能性が示された。

さらに、個別の項目におけるクラスター群別の特徴を詳細に検討するため、本章で特に焦点を当てた共生志向を取り上げ、CL1～CL4 と Q11 の各項目のクロス集計を行い  $\chi^2$  検定を行った (表 5)。その結果、いくつかの項目において 10～1%水準で有意差がみられた。残差分析の結果、CL1 の生徒は「街で困っているお年寄り・妊娠中の人・赤ちゃん連れの人に出会ったとき」に「積極的に手助けしたい」への回答の比率が高く「自分にとって関係ない気がする」への回答の比率が低かった。また、「街で困っている外国人に出会ったとき」にも「対応できる人に助けを求めたい」への回答の比率が高かった。CL2 の生徒は、「街で困っている妊娠中の人に出会ったとき」や「街で困っている赤ちゃん連れの人に出会ったとき」に「手助けするとお節介になる気がする」への回答の比率が高い傾向が見られた。CL2 と類似して、CL3 の生徒に関しても、「街で困っているお年寄りに出会ったとき」や「街で困っている妊娠中の人に出会ったとき」に、「手助けするとお節介になる気がする」への回答の比率が高い傾向がみられた。CL4 の生徒に関しては、「街で困っているお年寄り・外国人・妊娠中の人・赤ちゃん連れの人に出会ったとき」に「自分にとって関係ない気がする」への回答の比率が高い傾向が示された。

表 5 の結果から全体的な傾向として、街で困っている他者に出会ったとき、自らの社会的アイデンティティを多面的に認識している生徒 (CL1) は「手助けしたい」、自らの社会的アイデンティティについてミクロまたはマクロレベルで認識している生徒 (CL2 や CL3) は「お節介になる気がする」、そして社会的アイデンティティに関する自己認識が全体的に低い生徒 (CL4) は「自分にとって関係ない」と考えている可能性が示された。

表5 各クラスと「困っている他者への手助け志向 (Q11)」のクロス集計

		Q11_1_1 街で困っている障害のある人に出会ったとき		Q11_1_2 街で困っている障害のある人に出会ったとき		Q11_1_3 街で困っている障害のある人に出会ったとき	
		非該当	積極的に手助けしたい	非該当	対応できる人に助けを求めたい	非該当	どうしたらよいかわからない
CL1	度数	298	127	336	89	269	156
	期待度数	304.7	120.3	348.8	76.2	263.4	161.6
	%	70.1%	29.9%	79.1%	20.9%	63.3%	36.7%
	調整済み残差	-.9	.9	-2.1	2.1	.7	-.7
CL2	度数	201	71	226	46	162	110
	期待度数	195.0	77.0	223.2	48.8	168.6	103.4
	%	73.9%	26.1%	83.1%	16.9%	59.6%	40.4%
	調整済み残差	.9	-.9	.5	-.5	-1.0	1.0
CL3	度数	167	70	200	37	140	97
	期待度数	169.9	67.1	194.5	42.5	146.9	90.1
	%	70.5%	29.5%	84.4%	15.6%	59.1%	40.9%
	調整済み残差	-.5	.5	1.1	-1.1	-1.0	1.0
CL4	度数	94	32	108	18	86	40
	期待度数	90.3	35.7	103.4	22.6	78.1	47.9
	%	74.6%	25.4%	85.7%	14.3%	68.3%	31.7%
	調整済み残差	.8	-.8	1.1	-1.1	1.5	-1.5

$\chi^2(3) = 1.87, n. s.$

$\chi^2(3) = 4.18, n. s.$

$\chi^2(3) = 3.94, n. s.$

		Q11_1_4 街で困っている障害のある人に出会ったとき		Q11_1_5 街で困っている障害のある人に出会ったとき		Q11_1_6 街で困っている障害のある人に出会ったとき	
		非該当	手助けするとお節介になる気がする	非該当	自分にとって負担になる気がする	非該当	自分にとって関係ない気がする
CL1	度数	395	30	411	14	400	25
	期待度数	385.3	39.7	407.8	17.2	393.3	31.7
	%	92.9%	7.1%	96.7%	3.3%	94.1%	5.9%
	調整済み残差	2.1	-2.1	1.0	-1.0	1.6	-1.6
CL2	度数	242	30	259	13	250	22
	期待度数	246.6	25.4	261.0	11.0	251.7	20.3
	%	89.0%	11.0%	95.2%	4.8%	91.9%	8.1%
	調整済み残差	-1.1	1.1	-.7	.7	-.5	.5
CL3	度数	211	26	228	9	223	14
	期待度数	214.9	22.1	227.4	9.6	219.3	17.7
	%	89.0%	11.0%	96.2%	3.8%	94.1%	5.9%
	調整済み残差	-1.0	1.0	.2	-.2	1.0	-1.0
CL4	度数	113	13	119	7	108	18
	期待度数	114.2	11.8	120.9	5.1	116.6	9.4
	%	89.7%	10.3%	94.4%	5.6%	85.7%	14.3%
	調整済み残差	-.4	.4	-.9	.9	-3.1	3.1

$\chi^2(3) = 4.42, n. s.$

$\chi^2(3) = 1.77, n. s.$

$\chi^2(3) = 11.01, p < .05$

表5 各クラスと「困っている他者への手助け志向 (Q11)」のクロス集計 (続き)

		Q11_2_1 街で困っているお年寄りに出会ったとき		Q11_2_2 街で困っているお年寄りに出会ったとき		Q11_2_3 街で困っているお年寄りに出会ったとき	
		非該当	積極的に手助けしたい	非該当	対応できる人に助けを求めたい	非該当	どうしたらよいかわからない
CL1	度数	203	222	353	72	354	71
	期待度数	218.5	206.5	357.6	67.4	346.0	79.0
	%	47.8%	52.2%	83.1%	16.9%	83.3%	16.7%
	調整済み残差	-1.9	1.9	- .8	.8	1.3	-1.3
CL2	度数	130	142	235	37	223	49
	期待度数	139.8	132.2	228.9	43.1	221.4	50.6
	%	47.8%	52.2%	86.4%	13.6%	82.0%	18.0%
	調整済み残差	-1.4	1.4	1.2	-1.2	.3	- .3
CL3	度数	139	98	194	43	188	49
	期待度数	121.9	115.1	199.4	37.6	193.0	44.0
	%	58.6%	41.4%	81.9%	18.1%	79.3%	20.7%
	調整済み残差	2.5	-2.5	-1.1	1.1	-.9	.9
CL4	度数	73	53	110	16	98	28
	期待度数	64.8	61.2	106.0	20.0	102.6	23.4
	%	57.9%	42.1%	87.3%	12.7%	77.8%	22.2%
	調整済み残差	1.6	-1.6	1.0	-1.0	-1.1	1.1

$\chi^2(3)=10.81, p < .05$

$\chi^2(3)=3.28, n. s.$

$\chi^2(3)=2.84, n. s.$

		Q11_2_4 街で困っているお年寄りに出会ったとき		Q11_2_5 街で困っているお年寄りに出会ったとき		Q11_2_6 街で困っているお年寄りに出会ったとき	
		非該当	手助けするとお節介になる気がする	非該当	自分にとって負担になる気がする	非該当	自分にとって関係ない気がする
CL1	度数	371	54	414	11	413	12
	期待度数	364.1	60.9	415.4	9.6	405.8	19.2
	%	87.3%	12.7%	97.4%	2.6%	97.2%	2.8%
	調整済み残差	1.2	-1.2	-.6	.6	2.2	-2.2
CL2	度数	233	39	266	6	258	14
	期待度数	233.0	39.0	265.8	6.2	259.7	12.3
	%	85.7%	14.3%	97.8%	2.2%	94.9%	5.1%
	調整済み残差	.0	.0	.1	-.1	-.6	.6
CL3	度数	193	44	234	3	226	11
	期待度数	203.0	34.0	231.6	5.4	226.3	10.7
	%	81.4%	18.6%	98.7%	1.3%	95.4%	4.6%
	調整済み残差	-2.1	2.1	1.2	-1.2	-.1	.1
CL4	度数	111	15	122	4	115	11
	期待度数	107.9	18.1	123.1	2.9	120.3	5.7
	%	88.1%	11.9%	96.8%	3.2%	91.3%	8.7%
	調整済み残差	.8	-.8	-.7	.7	-2.4	2.4

$\chi^2(3)=4.98, n. s.$

$\chi^2(3)=1.75, n. s.$

$\chi^2(3)=8.25, p < .05$

表5 各クラスと「困っている他者への手助け志向 (Q11)」のクロス集計 (続き)

		Q11_3_1 街で困っている外国人に出会ったとき		Q11_3_2 街で困っている外国人に出会ったとき		Q11_3_3 街で困っている外国人に出会ったとき	
		非該当	積極的に手助けしたい	非該当	対応できる人に助けを求めたい	非該当	どうしたらよいかわからない
CL1	度数	282	143	300	125	297	128
	期待度数	284.3	140.7	315.1	109.9	291.5	133.5
	%	66.4%	33.6%	70.6%	29.4%	69.9%	30.1%
	調整済み残差	-.3	.3	-2.2	2.2	.7	-.7
CL2	度数	180	92	202	70	189	83
	期待度数	181.9	90.1	201.7	70.3	186.6	85.4
	%	66.2%	33.8%	74.3%	25.7%	69.5%	30.5%
	調整済み残差	-.3	.3	.0	.0	.4	-.4
CL3	度数	162	75	180	57	154	83
	期待度数	158.5	78.5	175.7	61.3	162.5	74.5
	%	68.4%	31.6%	75.9%	24.1%	65.0%	35.0%
	調整済み残差	.5	-.5	.7	-.7	-1.4	1.4
CL4	度数	85	41	104	22	87	39
	期待度数	84.3	41.7	93.4	32.6	86.4	39.6
	%	67.5%	32.5%	82.5%	17.5%	69.0%	31.0%
	調整済み残差	.1	-.1	2.3	-2.3	.1	-.1

$\chi^2(3)=3.66, n.s.$

$\chi^2(3)=7.84, p < .05$

$\chi^2(3)=1.88, n.s.$

		Q11_3_4 街で困っている外国人に出会ったとき		Q11_3_5 街で困っている外国人に出会ったとき		Q11_3_6 街で困っている外国人に出会ったとき	
		非該当	手助けするとお節介になる気がする	非該当	自分にとって負担になる気がする	非該当	自分にとって関係ない気がする
CL1	度数	405	20	419	6	406	19
	期待度数	402.1	22.9	415.4	9.6	400.5	24.5
	%	95.3%	4.7%	98.6%	1.4%	95.5%	4.5%
	調整済み残差	.8	-.8	1.5	-1.5	1.5	-1.5
CL2	度数	252	20	263	9	257	15
	期待度数	257.4	14.6	265.8	6.2	256.3	15.7
	%	92.6%	7.4%	96.7%	3.3%	94.5%	5.5%
	調整済み残差	-1.7	1.7	-1.3	1.3	.2	-.2
CL3	度数	226	11	233	4	224	13
	期待度数	224.3	12.7	231.6	5.4	223.4	13.6
	%	95.4%	4.6%	98.3%	1.7%	94.5%	5.5%
	調整済み残差	.6	-.6	.7	-.7	.2	-.2
CL4	度数	120	6	121	5	112	14
	期待度数	119.2	6.8	123.1	2.9	118.7	7.3
	%	95.2%	4.8%	96.0%	4.0%	88.9%	11.1%
	調整済み残差	.3	-.3	-1.4	1.4	-2.8	2.8

$\chi^2(3)=2.81, n.s.$

$\chi^2(3)=4.76, n.s.$

$\chi^2(3)=8.02, p < .05$

表5 各クラスと「困っている他者への手助け志向 (Q11)」のクロス集計 (続き)

		Q11_4_1 街で困っている妊婦中の人に出会ったとき		Q11_4_2 街で困っている妊婦中の人に出会ったとき		Q11_4_3 街で困っている妊婦中の人に出会ったとき	
		非該当	積極的に手助けしたい	非該当	対応できる人に助けを求めたい	非該当	どうしたらよいかわからない
CL1	度数	195	230	345	80	330	95
	期待度数	218.5	206.5	348.8	76.2	324.4	100.6
	%	45.9%	54.1%	81.2%	18.8%	77.6%	22.4%
	調整済み残差	-2.9	2.9	-.6	.6	.8	-.8
CL2	度数	144	128	224	48	208	64
	期待度数	139.8	132.2	223.2	48.8	207.6	64.4
	%	52.9%	47.1%	82.4%	17.6%	76.5%	23.5%
	調整済み残差	.6	-.6	.1	-.1	.1	-.1
CL3	度数	72	54	197	40	175	62
	期待度数	64.8	61.2	194.5	42.5	180.9	56.1
	%	57.1%	42.9%	83.1%	16.9%	73.8%	26.2%
	調整済み残差	1.4	-1.4	.5	-.5	-1.0	1.0
CL4	度数	134	103	104	22	96	30
	期待度数	121.9	115.1	103.4	22.6	96.2	29.8
	%	56.5%	43.5%	82.5%	17.5%	76.2%	23.8%
	調整済み残差	1.8	-1.8	.1	-.1	.0	.0

$\chi^2(3)=9.61, p < .05$

$\chi^2(3)=0.44, n. s.$

$\chi^2(3)=1.23, n. s.$

		Q11_4_4 街で困っている妊婦中の人に出会ったとき		Q11_4_5 街で困っている妊婦中の人に出会ったとき		Q11_4_6 街で困っている妊婦中の人に出会ったとき	
		非該当	手助けするとお節介になる気がする	非該当	自分にとって負担になる気がする	非該当	自分にとって関係ない気がする
CL1	度数	412	13	421	4	409	16
	期待度数	399.7	25.3	419.8	5.2	400.9	24.1
	%	96.9%	3.1%	99.1%	.9%	96.2%	3.8%
	調整済み残差	3.2	-3.2	.7	-.7	2.2	-2.2
CL2	度数	249	23	269	3	256	16
	期待度数	255.8	16.2	268.7	3.3	256.6	15.4
	%	91.5%	8.5%	98.9%	1.1%	94.1%	5.9%
	調整済み残差	-2.0	2.0	.2	-.2	-.2	.2
CL3	度数	215	22	235	2	222	15
	期待度数	222.9	14.1	234.1	2.9	223.6	13.4
	%	90.7%	9.3%	99.2%	.8%	93.7%	6.3%
	調整済み残差	-2.5	2.5	.6	-.6	-.5	.5
CL4	度数	121	5	122	4	113	13
	期待度数	118.5	7.5	124.5	1.5	118.9	7.1
	%	96.0%	4.0%	96.8%	3.2%	89.7%	10.3%
	調整済み残差	1.0	-1.0	-2.1	2.1	-2.4	2.4

$\chi^2(3)=15.00, p < .01$

$\chi^2(3)=4.55, n. s.$

$\chi^2(3)=8.20, p < .05$

表5 各クラスと「困っている他者への手助け志向 (Q11)」のクロス集計 (続き)

		Q11_5_1 街で困っている赤ちゃん連れの人に出会ったとき		Q11_5_2 街で困っている赤ちゃん連れの人に出会ったとき		Q11_5_3 街で困っている赤ちゃん連れの人に出会ったとき	
		非該当	積極的に手助けしたい	非該当	対応できる人に助けを求めたい	非該当	どうしたらよいかわからない
CL1	度数	207	218	350	75	336	89
	期待度数	226.5	198.5	356.4	68.6	328.4	96.6
	%	48.7%	51.3%	82.4%	17.6%	79.1%	20.9%
	調整済み残差	-2.5	2.5	-1.1	1.1	1.1	-1.1
CL2	度数	144	128	231	41	214	58
	期待度数	145.0	127.0	228.1	43.9	210.2	61.8
	%	52.9%	47.1%	84.9%	15.1%	78.7%	21.3%
	調整済み残差	-1	.1	.6	-6	.6	-6
CL3	度数	140	97	199	38	172	65
	期待度数	126.3	110.7	198.8	38.2	183.1	53.9
	%	59.1%	40.9%	84.0%	16.0%	72.6%	27.4%
	調整済み残差	2.0	-2.0	.0	.0	-2.0	2.0
CL4	度数	74	52	109	17	97	29
	期待度数	67.2	58.8	105.7	20.3	97.4	28.6
	%	58.7%	41.3%	86.5%	13.5%	77.0%	23.0%
	調整済み残差	1.3	-1.3	.9	-9	-1	.1

$\chi^2(3)=8.28, p < .05$

$\chi^2(3)=1.60, n. s.$

$\chi^2(3)=4.06, n. s.$

		Q11_5_4 街で困っている赤ちゃん連れの人に出会ったとき		Q11_5_5 街で困っている赤ちゃん連れの人に出会ったとき		Q11_5_6 街で困っている赤ちゃん連れの人に出会ったとき	
		非該当	手助けするとお節介になる気がする	非該当	自分にとって負担になる気がする	非該当	自分にとって関係ない気がする
CL1	度数	395	30	417	8	406	19
	期待度数	385.3	39.7	417.0	8.0	396.9	28.1
	%	92.9%	7.1%	98.1%	1.9%	95.5%	4.5%
	調整済み残差	2.1	-2.1	.0	.0	2.3	-2.3
CL2	度数	238	34	268	4	252	20
	期待度数	246.6	25.4	266.9	5.1	254.0	18.0
	%	87.5%	12.5%	98.5%	1.5%	92.6%	7.4%
	調整済み残差	-2.1	2.1	.6	-6	-6	.6
CL3	度数	212	25	234	3	221	16
	期待度数	214.9	22.1	232.5	4.5	221.3	15.7
	%	89.5%	10.5%	98.7%	1.3%	93.2%	6.8%
	調整済み残差	-.7	.7	.8	-8	-1	.1
CL4	度数	116	10	121	5	111	15
	期待度数	114.2	11.8	123.6	2.4	117.7	8.3
	%	92.1%	7.9%	96.0%	4.0%	88.1%	11.9%
	調整済み残差	.6	-6	-1.8	1.8	-2.6	2.6

$\chi^2(3)=6.52, p < .10$

$\chi^2(3)=3.70, n. s.$

$\chi^2(3)=9.13, p < .05$

最後に、生き方の願望 (Q18) を取り上げて  $\chi^2$  検定を行った (表 6)。残差分析の結果、CL4 の生徒は、「夢の実現のために努力」への回答の比率が低く、「成り行きに任せておだやかに過ごす」「人とかかわりを避けてひとりで過ごす」への回答の比率が高かった。CL1 の生徒は、調整済み残差 1.96 の基準には至っていないものの、「夢の実現のために努力」への回答の比率が高く、「成り行きに任せておだやかに過ごす」「人とかかわりを避けてひとりで過ごす」への回答の比率が低い傾向がみられた。社会的アイデンティティの認識パターンによって、目指す生き方にも違いが生じている可能性が示された。

表 6 各クラスにおける「生き方の願望」に関するクロス集計

		Q18 したいと思っている生き方					
		夢の実現のための努力	与えられた範囲で生活を楽しむ	身近な人となごやかに過ごす	協力してよりよい社会をつくる	成り行きに任せておだやかに過ごす	人とかかわりを避けてひとりで過ごす
CL1	度数	222	40	82	25	24	7
	期待度数	209.1	46.2	79.8	20.9	32.0	11.9
	%	55.5%	10.0%	20.5%	6.3%	6.0%	1.8%
	調整済み残差	1.7	-1.3	.3	1.2	-1.9	-1.8
CL2	度数	140	30	49	13	21	9
	期待度数	137.0	30.3	52.3	13.7	21.0	7.8
	%	53.4%	11.5%	18.7%	5.0%	8.0%	3.4%
	調整済み残差	.4	-.1	-.6	-.2	.0	.5
CL3	度数	116	32	48	9	15	6
	期待度数	118.1	26.1	45.1	11.8	18.1	6.7
	%	51.3%	14.2%	21.2%	4.0%	6.6%	2.7%
	調整済み残差	-.3	1.4	.5	-1.0	-.9	-.3
CL4	度数	51	15	23	6	21	8
	期待度数	64.8	14.3	24.8	6.5	9.9	3.7
	%	41.1%	12.1%	18.5%	4.8%	16.9%	6.5%
	調整済み残差	-2.7	.2	-.4	-.2	3.9	2.4

$$\chi^2(15) = 30.40, p < .05$$

#### 4. 総合的考察

本章では、中高生の社会的アイデンティティに関わる個々人の認識の多様性に焦点を当て、それらが共生に関わる経験や認知とどのように関連し、どのように共生志向に影響を及ぼしているのかを多角的に検討することを目的とした。

パス解析の結果を踏まえると、重決定係数や標準偏回帰係数の値からモデルの説明力の低さには留意する必要があるものの、①家庭や地域での他者との様々な接点・交流または会話経験 (男子は主に地域での経験、女子では家庭での経験) が共生志向的な態度に直接的に正の影響を及ぼしている可能性、②特に中学生よりも高校生において社会的アイデンティティの多様性が共生志向的な態度に肯定的な影響を及ぼしている可能性が示された (高校生男子では、障害者や外国人のための社会づくりと外国及び外国人との積極的交流、高校生女子では他者のための援助要請に正の影響)。先述の通り、成人調査での結果 (新井・桜井, 2014) との単純な比較は難しいものの、中高生にとっては、共生社会に関わる認知

やイメージに比べて、共生に関連する日々の直接的な経験・体験の方が、共生志向の向上において有用である可能性があること、そして社会的アイデンティティに関わる認識の多様性が共生志向に及ぼす影響の程度は発達段階によって異なる可能性が示された点は、注目に値する結果と考えられる。社会的アイデンティティに関わる認識の多様性（自らの社会的アイデンティティについて様々な視点から多角的に認識できること）が実際の共生志向的な態度に結びつくためには、ある程度の認知的・発達の成熟が必要なかもしれない。さらに、中高生の社会的アイデンティティの多様性に影響を及ぼす変数については、中学生・高校生及び男女共に家族内の話題（Q6）が一貫して正の影響を及ぼしていた。発達段階や性差に関係なく、家庭内で社会や人々の生活について日頃から会話する経験は、社会生活の中での自分自身の存在を意識づけ、生徒の社会的アイデンティティを多面的に認識するための重要な要因の1つとなっている可能性がある。

続いて、中高生の社会的アイデンティティの認識パターンに基づいて検討した結果、自らの社会的アイデンティティを多面的に認識している生徒は自らの住んでいる町、政治や社会の問題、障害者・外国人・高齢者の生活などについて家族で話す経験や、家庭、学校、地域において様々な他者との接点・交流経験を有していること、これから目指していきたい生き方についても「夢の実現のために努力する」方向への意識を有している傾向がみられた。反対に、自らの社会的アイデンティティに関する認識が全体的に低い生徒は、上述の経験が少なかったり、これからの生き方も「成り行きに任せておだやかに過ごす」「人とのかかわりを避けてひとりで過ごす」意識が高くなっている可能性が示された。

特に、共生志向の程度に焦点を当てると、自らの社会的アイデンティティを多面的に認識している生徒は、障害者や外国人のための社会づくりや、外国・外国人との積極的交流に対して肯定的な意識を有していること、街で困っている他者への配慮（手助けをしたり、対応できる人に助けを求めるなど）の意識を有している一方で、自らの社会的アイデンティティについてマイクロまたはマクロレベルで認識している生徒は「（街で困っている他者への対応について）お節介になる気がする」、社会的アイデンティティに関する認識が全体的に低い生徒は「自分にとって関係ない」と考えている可能性が示された。

以上の点は、「社会的カテゴリーの絶えざる問い直し」を踏まえたプロセスとしての共生を展開するための教育実践において重要な結果であると同時に、それらの教育実践を進めていくための1つの根拠ともなり得る結果と考えられる。自己の存在が社会の中でどのように位置づけられているのか、それを多様な枠組みから認識できるということは、自己認識や他者との関係を特定の枠組みに基づいて固定化して捉え過ぎてしまうことによる差別・偏見等を防ぎ、現実社会における社会的カテゴリーの多様性や複雑性に対する寛容な態度、および多様な個性や背景を有する他者との「共生」を志向する意識へとつながっている可能性がある。したがって本章で得られた結果を踏まえると、「共生」に関わる日々の経験や体験を積み重ねると同時に、発達段階及び性差を考慮しながらも、ある特定の社会

的カテゴリーに縛られず社会的存在としての自己を多面的に認識できる態度を育てること、そのための教育実践の在り方を検討し進めていくことが、中学生・高校生の共生志向的な態度の向上につながり得る可能性がある。

また、そのような教育実践を展開する際には、学校教育に加え、家庭や地域での生活・活動にも目を向ける必要がある。実際に、心理学研究においても、社会的カテゴリーが否定的なかたちで固定化されることによって生じる人々のステレオタイプ、偏見、差別を軽減するためには、個々人の意識的な認知制御に期待するばかりでなく、固定的なステレオタイプ、偏見、差別を緩和できる日々の生活空間・環境そのものをいかに習慣的に整えるかという点も重要とされる（新井・庄司，2016）。本章で示された家族内の話題（Q6）から社会的アイデンティティの多様性への肯定的な影響も考慮に入れつつ、子ども達の多様で柔軟性の高い社会的アイデンティティに関わる認識を育て、他者や社会全体に対する共生志向を育てるため、学校・家庭・地域の協力に基づく包括的な取り組みが求められる。

もちろん、本章で焦点を当てた Q22 の項目（自己の社会的帰属意識）は、社会的アイデンティティに関わる自己認識についての多様性の程度を問うものであり、これが自己認識の枠組みを越えて他の人々や集団、社会的な事象における社会的カテゴリーの認識枠組みの多様性を意味するのかどうか、その自己および他者認識の枠組みの「更新」あるいは「絶えざる問い直し」を可能とする意識と捉えてよいのかどうか、さらにその絶えざる問い直しに伴って生じる葛藤や対立をも引き受けながら（社会的カテゴリーの多様性や複雑性を認識することに伴う曖昧さへの耐性（Ross & Brewer, 2002）を身に付けながら）、継続的に「共生」を目指すことのできる姿勢と捉えてよいかどうかには慎重である必要があり、さらなる調査・検討が求められる。

しかし本分析の結果からは、自らの社会的アイデンティティを多面的に認識できるということが中高生の共生志向的な態度と無関係ではなく、むしろ肯定的に志向していくための要因となっている可能性が示され、「社会的カテゴリーの絶えざる問い直し」を踏まえたプロセスとしての共生を展開するための1つの根拠となり得る結果と考えられる。

#### 【注記】

- 1) Q15（日本社会の現状認識）の主成分分析結果を表7に示した。第一主成分の成分行列を踏まえると、Q15\_9「学歴がものを言う社会だ」以外の全ての項目が高い正の値を示していたことから、本章では第一主成分を「日本社会における共生の現状認識」と名付けた。
- 2) Q22（自己の社会的帰属意識）の主成分分析結果を表8に示した。第一主成分の成分行列を踏まえると、自らの社会的アイデンティティに関する様々な側面の認識が高い正の値を示していたことから、本章では第一主成分を「社会的アイデンティティの多様性」と名付けた。
- 3) Q16（外国人・障害者のための社会づくりへの賛否）の主成分分析結果を表9に示した。第一主成分の成分行列を踏まえると、障害者や外国人が生活しやすい日本社会づくりに関する様々な項目が正の値を示していることから、本章では第一主成分を「障害者や外国人のための社会づくり」と名付けた。
- 4) Q17（国際志向）の主成分分析結果を表10に示した。第一主成分の成分行列を踏まえると、特に様々な外国及び外国人との対人的交流や支援活動への前向きな意識に関する項目を中心に正の値を示していることから、本章では第一主成分を「外国及び外国人との積極的交流」と名付けた。

表7 Q15の主成分分析結果

説明された分散の合計							成分行列			
成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和				成分		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%		1	2	3
1	4.754	33.956	33.956	4.754	33.956	33.956	Q15_3 障害のある人が暮らしやすい社会だ	.677	.215	-.124
2	1.397	9.981	43.936	1.397	9.981	43.936	Q15_7 人々の意見や行動が大切にされる社会だ	.674	-.002	-.099
3	1.136	8.114	52.051	1.136	8.114	52.051	Q15_10 子育てしやすい社会だ	.669	.078	-.121
4	.981	7.010	59.061				Q15_8 子どもの意見が取り入れられやすい社会だ	.661	-.133	-.288
5	.936	6.684	65.745				Q15_11 誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会だ	.652	-.549	-.018
6	.797	5.690	71.434				Q15_14 人々が助け合って生きている社会だ	.646	-.172	.311
7	.717	5.120	76.555				Q15_12 どこに住んでも同じように暮らせる社会だ	.612	-.572	.036
8	.660	4.714	81.269				Q15_6 外国人が暮らしやすい社会だ	.600	.395	.138
9	.546	3.902	85.171				Q15_4 高齢者が暮らしやすい社会だ	.584	.228	.124
10	.543	3.878	89.049				Q15_1 女性が働きやすい社会だ	.558	.296	-.211
11	.468	3.345	92.394				Q15_2 性同一性障害や同性愛など、性的マイノリティ(少数者)の人が暮らしやすい社会だ	.538	.154	-.458
12	.419	2.993	95.387				Q15_5 若者が暮らしやすい社会だ	.458	.421	.251
13	.376	2.687	98.073				Q15_13 安全・安心に暮らせる社会だ	.474	-.252	.586
14	.270	1.927	100.000				Q15_9 学歴がものを言う社会だ	.058	.329	.469

表8 Q22の主成分分析結果

説明された分散の合計							成分行列	
成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和				成分
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%		
1	7.847	78.468	78.468	7.847	78.468	78.468	Q22_6 ○○家(生まれ育った家族)の一員である、ということ	.968
2	.775	7.754	86.222				Q22_10 ○○人(日本人、中国人、アメリカ人、・・・)である、ということ	.968
3	.683	6.828	93.050				Q22_7 ○○市(町・村)の市民(町民・村民)である、ということ	.967
4	.435	4.350	97.400				Q22_9 ○○国(日本、中国、アメリカ、・・・)の国民である、ということ	.967
5	.172	1.721	99.121				Q22_4 ○○中学校・○○高等学校(通っている学校)の生徒である、ということ	.936
6	.030	.299	99.421				Q22_2 ○○歳(自分の年齢)である、ということ	.932
7	.023	.235	99.655				Q22_1 男である、女である、ということ	.931
8	.017	.167	99.823				Q22_8 ○○県(都道府)の県民(都民・道民・府民)である、ということ	.888
9	.014	.137	99.960				Q22_5 若者である、ということ	.618
10	.004	.040	100.000				Q22_3 中学生である、高校生である、ということ	.568

表9 Q16の主成分分析結果

説明された分散の合計							成分行列		
成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			成分		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	1	2	
1	3.649	45.607	45.607	3.649	45.607	45.607	Q16_3 国籍に関係なく、仕事を得る機会が同じようにあること	.734	-.426
2	1.104	13.800	59.407	1.104	13.800	59.407	Q16_7 障害に関係なく、仕事を得る機会が同じようにあること	.723	.442
3	.784	9.799	69.205				Q16_5 障害のある人が暮らしやすい社会にすること	.718	.222
4	.679	8.489	77.694				Q16_2 学校で、日本人の生徒と外国人の生徒が一緒にの教室で学ぶこと	.701	-.251
5	.560	6.995	84.689				Q16_1 外国人が暮らしやすい社会にすること	.698	-.437
6	.471	5.882	90.571				Q16_6 学校で、障害のある生徒と障害のない生徒が一緒にの教室で学ぶこと	.663	.477
7	.447	5.586	96.157				Q16_4 永住外国人(国籍はなくても、日本に住み続けることが認められている人)が政治に参加できるようにすること	.634	-.277
8	.307	3.843	100.000				Q16_8 障害のある人の公共交通機関(鉄道やバス)の利用料金を安くすること	.501	.346

表 10 Q17の主成分分析結果

説明された分散の合計							成分行列		
成分	初期の固有値			抽出後の負荷量平方和			成分		
	合計	分散の%	累積%	合計	分散の%	累積%	1	2	
1	4.814	48.140	48.140	4.814	48.140	48.140	Q17_7 留学すること	.781	-.281
2	1.280	12.800	60.940	1.280	12.800	60.940	Q17_2 いろいろな国の人と友達になること	.774	.071
3	.837	8.373	69.313				Q17_6 留学生のホストファミリーをすること	.761	-.099
4	.661	6.607	75.920				Q17_8 外資系の企業で外国人の上司や同僚と一緒に働くこと	.759	-.222
5	.586	5.863	81.783				Q17_4 日本にいる外国人を支援する活動に協力すること	.715	.448
6	.446	4.462	86.245				Q17_10 外国で長く暮らすこと	.692	-.445
7	.407	4.073	90.318				Q17_3 貧しい国の人たちへの支援活動に協力すること	.653	.510
8	.392	3.921	94.239				Q17_5 外国語を使いこなせるようにすること	.626	.088
9	.289	2.893	97.131				Q17_9 外国人と恋愛すること	.580	-.467
10	.287	2.869	100.000				Q17_1 何らかのかたちで日本の社会に貢献すること	.552	.503

【文献】

- 新井 雅・桜井淳平, 2014, 「共生志向」に影響を及ぼす要因の検討」 岡本智周・坂口真康編『共生社会に関する調査——2014年調査』 筑波大学人間系研究戦略委員会, pp. 18-35.
- 新井 雅・庄司一子 2016, 「共生社会および共生教育の展開における心理学研究の貢献可能性の検討」『共生教育学研究』, 5, pp. 37-51.
- Bal-Tal, D. 2011, Introduction: Conflicts and social psychology. In D, Bal-Tal (Ed.), *Intergroup conflict and their resolutions: A social psychological perspective*. New York: Psychology Press, pp. 1-38. (=2012, 熊谷智博・大淵憲一訳 『紛争と平和構築の社会心理学——集団間の葛藤とその解決』 北大路書房 pp. 1-40)
- Brewer, M.B. 2011, Identity and conflict. In D. Bal-Tal (Ed.) *Intergroup conflict and their resolutions: A social psychological perspective*. New York : Psychology Press, pp. 61-82 (= 2012, 熊谷智博・大淵憲一訳 『紛争と平和構築の社会心理学——集団間の葛藤とその解決』 北大路書房 pp. 132-152)
- 内閣府における共生社会形成促進のための政策研究会, 2005, 「共に生きる新たな結び合い」の提唱(詳細版)」
- 岡本智周, 2011, 「個人化社会で要請される〈共に生きる力〉」, 岡本智周・田中統治(編)『共生と希望の教育学』筑波大学出版会, pp. 30-41.
- 岡本智周, 2016, 「本書のねらい——共生の論理の社会学的研究」, 岡本智周・丹治恭子(編)『共生の社会学——ナショナリズム, ケア, 世代, 社会意識』 太郎次郎社エディタス, pp. 9-14.
- Roccas, S. & Brewer, M. B. 2002, Social identity complexity. *Personality and Social Psychology Review*, 6, 88-109.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. 1986, The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel & W.G. Austin (Eds.) *The psychology of intergroup relations*. Chicago: Nelson-Hall, pp. 7-24.